核融合固有の安全性を生かした 運転手法の検討

東京大学大学院新領域創成科学研究科 先端エネルギーエ学専攻 岡野研究室 古谷 晃

目次

- 核融合固有の安全性
- 負荷追従運転
- ・負荷追従運転による炉の放射化への影響
- 負荷追従運転を行うための出力変動手法の検討
 - 検討に使用した核融合炉概念設計コードについて
 - DT比調節運転
 - 準パルス定常運転
- まとめ

核融合固有の安全性

核分裂炉

- 核燃料中の放射性生成物が崩壊熱を発生させる
- ・ 運転停止直後の崩壊熱量を大きく下げることはできない.

核融合炉

- 運転停止直後の崩壊熱は、中性子によって放射化された 構造物によるものがほとんど
- ・
 か射化しにくいような材料の選択や、
 ・
 中性子負荷をある程 度に抑えるなどの設計により崩壊熱をコントロールするこ とができる。
- 核分裂炉に比べて大きなアドバンテージ

受動的安全性

- 崩壊熱の発生密度がある程度以下では、緊急炉心冷却装置などの能動的な熱除去設備を設けずとも、設備の健全性を維持することが可能
- 設計条件として受動的安全性を取り入れる場合、炉の大きさが核融合出力の大きな制約となりうる。



ー日の時間

負荷追従運転による 炉の放射化への影響

中性子負荷による放射化の検討

あらかじめ計算された崩壊熱の経過時間による変化から、各 経過時間における崩壊熱の時定数を求め、サイクル運転 による出力の増減の影響を計算した

想定条件

- 運転パターン
- 核融合出力 2GW→4GW
- 高出力継続時間8時間
- 8時間の高出力運転終了直前で炉が停止したと仮定
- 運転時の平均核融合出力が等しい定常炉と比較し、負荷 追従運転を行った場合でも安全性の尤度が保たれること を検証



負荷追従運転と定常運転による 崩壊熱の比較



崩壊熱1カ月



負荷追従運転と定常運転による 崩壊熱の比較





設計条件

Y.R. Lin-Liu and R.D. Stambaugh: Nucl. Fusion44 (2004) 548-554.

• 楕円度はアスペクト比から決定 $k = \left[a_1 + \left(\frac{a_2}{A}\right) - \left(\frac{a_3}{A^2}\right)\right] \cdot (a_4 \cdot A + a_5)$ • $\beta_N < 0.75 \beta_{Nmax}$, $n_e/n_{GW} \le 1$ a1 = a2 = a3 = a4 = a50.3 9.1 5.7 0.1 0.6

$$\beta_{N \max} = 10 \cdot \left(b_0 + b_1 k + b_2 k^2 + b_3 k^3 \right) \times \coth\left(\frac{d_0 + d_1 k}{A^m}\right) \cdot \frac{1}{A^n}$$

	b0	b1	b2	b3	d0	d1	m	n
-	-0.8	1.3	-0.3	0	1.9	0.2	0.6	0.6



設計パラメータ

プラ	ズマパラメータ	TF コイル設計パラメータ		
大半径 (m)	6,8	超電導線材	Nb3Al	
アスペクト比	2.5,3	運転温度 (K)	5	
	マフペクレレートス	許容最大温度 (K)	250	
	アスペクト比による	許容端子間電圧 (KV)	20	
<i>中心磁場B</i> _T	コイル設計による	許容応力 (MPa)	800	
δ ₉₅	0.35	コイル本数	15	
Ti(keV)	18	コイルケース厚さ (m)	0.1	
密度n。	B _N とn _e /n _{GW} により決定	コイル太さ (m)	1	
		コイル遮蔽厚さ (m)	1.4	
β_{N}	0.75β _{Nmaxを} 上限		100	
$I_{\rm p}({ m MA})$	q _Ψ : 3,4,5	クエンチ遅れ時間(s)	0.5	

DT比の
 調節による
 出力変化手法
 大半径6mアスペクト比2.5

	DT比					
	5:5	6:4	7:3	8:2	9:1	
核融合出力(MW)	3030	2970	2760	2320	1410	
NBI加熱パワー (MW)	176	181	186	191	193	
発電端出力(MW)	1375	1349	1258	1070	673	
送電端(MW)	998	965	869	683	303	
中性子壁負荷 (MW/ m2)	3.36	3.29	3.05	2.57	1.55	
QELC	4.4	4.2	3.8	3.1	1.9	
HH98	1.139	1.156	1.205	1.308	1.54	
Beta-N	4.15	4.15	4.15	4.15	4.03	
NE/NGW	0.812	0.832	0.875	0.949	1.021	
IP (MA)	18	18	18	18	18	
BS電流比	0.61	0.613	0.633	0.678	0.719	

準定常パルス運転手法の検討

- CSコイルによる誘導電流駆動と、NBIなどによる非誘導電流 駆動を併用するハイブリッド運転によりCSコイルの充電と放 電を電力需要に応じて行うことで、プラズマ電流を上下させ ることにより、核融合出力を変化させる運転を行う準パルス 定常トカマク炉という運転方式を提案する.
- メリット
- 高出力時には誘導電流駆動で電流を補うので、非誘導電流駆動で消費される電力が減少し、さらなる高出力化、低出力時にはCSコイルの充電を行うのでその分より所内で電力が消費されることで、これらの効果により核融合出力変化以上に送電端出力を変化させることが可能

<u>大半径6mでアスペクト比が2.5</u>

	定常運転			ハイブリッド運転		
IP (MA)	15	16.5	18	15 (CS-1.5)	18	18 (CS+2)
核融合出力 (MW)	2570	2930	3310	2740	3030	3620
NBI加熱パ ワー (MW)	69	137	211	186	176	128
発電端出力 (MW)	1137	1317	1507	1251	1375	1613
送電端(MW)	951	1007	1064	863	998	1305
中性子壁負 荷 (MW/m2)	2.85	3.24	3.67	3.03	3.36	4.01
QELC	9.3	5.4	4	3.8	4.4	7.1
HH98	1.345	1.197	1.081	1.17	1.139	1.115
Beta-N	4.15	4.15	4.15	4.15	4.15	4.15
NE/NGW	0.983	0.935	0.894	0.89	0.812	0.958
BS電流比	0.838	0.719	0.628	0.684	0.61	0.671

大半径が8mでアスペクト比が3

	定常運転			ハイブリッド運転			
IP (MA)	16	18	22	16 (CS-2)	18	22 (CS+4)	22 (CS+4)
核融合出 力 (MW)	2750	3240	4420	2570	2570	4130	6230
NBI加熱 パワー (MW)	55	141	324	105	98	117	73
発電端出 力(MW)	1210	1452	2027	1152	1148	1832	2726
送電端 (MW)	1042	1128	1372	905	912	1532	2460
中性子壁 負荷 (MW/m2)	2.15	2.53	3.45	2.01	2.01	3.23	4.87
QELC	12.3	5.8	3.5	6.2	6.6	8.9	21.3
HH98	1.148	0.993	0.792	1.119	1.1	0.912	0.921
Beta-N	3.13	3.13	3.13	3.13	3.05	3.1	3.69
NE/NGW	0.964	0.911	0.845	0.918	0.732	0.763	0.951
BS電流比	0.868	0.71	0.535	0.816	0.669	0.565	0.701

大半径が8mでアスペクト比が3, プラズマ性能はITERと同程度

	定常運転			ハイブリッド運転			
IP (MA)	17	18	20	17 (CS-2)	18	18 (CS+5)	20 (CS+5)
核融合出 力(MW)	2210	2450	2950	2100	2450	2770	3310
NBI加熱 パワー (MW)	179	213	293	202	213	133	207
発電端出 力(MW)	1020	1134	1378	979	1134	1247	1509
送電端 (MW)	655	707	805	577	707	948	1073
中性子壁 負荷 (MW/m2)	1.73	1.91	2.3	1.64	1.91	2.16	2.59
QELC	3.2	3	2.6	2.7	3	5.3	4.1
HH98	1.202	1.13	1.007	1.187	1.13	1.169	1.038
Beta-N	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6
NE/NGW	0.814	0.806	0.789	0.787	0.806	0.876	0.855
BS電流比	0.407	0.379	0.332	0.393	0.379	0.407	0.357



- 今回想定した条件では負荷追従運転を行った場合でも、崩壊熱の発生量は運転時の平均核融合出力と比例すると考えてよいことがわかった.
- DT比による出力調整の検討においては、可能であるが、シビアな割合の調整が必要となることが分かった。
- 準パルス定常運転という、CSコイルの充電時と 放電時において出力を変化させる運転方法を提 案した.
- 準パルス定常炉には既存の運転方式には無い 大きなメリットが存在することが核融合炉概念設 計コードにおいても確認することができた.



Time after shutdown, year

Y. Someya, K. Tobita, Estimation of decay heat in fusion DEMO reactor, 21st International Toki Conference, ITC-21 11/28-12/1, 2011.

研究課題2

プラズマ物理計算コードのアルゴリズム



研究課題2

$$\phi_{CS} = 2 \times \pi \times B_{CS} \times \left\{ R_{CS}^2 - \left(\frac{d_{CS}^2}{6}\right) \right\} \qquad L_p = \mu_0 R_0 \left(\ln \frac{8R_0}{a_0} + \frac{l_i}{2} - 2 \right)$$

- $\langle \gamma_{NC} \rangle$: 新古典抵抗性增幅係数
 - *I*_{ind}: *CS* コイルによる誘導電流(*A*)
 - T₁₀ : プラズマの温度/10keV

大半径6mでアスペクト比が2.5

この案は受動的安全性を確保したままピーク時に高出力で運転することを念頭に置いて計算を行った.

CSコイル (MA)	-1.5	0	2
プラズマ電流 (MA)	16.5	18	18
送電端出力(MW)	860	1000	1300
中性子壁負荷 (MW/m2)	3	3.36	4
運転可能時間 (h)			4.5

- 大半径が8mでアスペクト比が3
- この案は定常運転で送電端出力1GWを達成できる最小の大半径 が8mと考えられていることから、中性子壁負荷の平均を抑えながら、 どこまでピーク時の出力を確保できるかを念頭に置いて計算を行っ た.
- 大半径が大きいので中性子壁負荷も大半径6mの炉に比べて低く なっており、さらにCSコイルが大きいので、フルに使った場合1日間 高出力運転が可能となっている。

CSコイル (MA)	-1.5	0	4	4
プラズマ電流 (MA)	16	18	18	22
送電端出力(MW)	905	912	1530	2460
中性子壁負荷(MW/m2)	2.01	2.01	3.23	4.87
運転可能時間(h)			24<	24<
3				

- 大半径が8mでアスペクト比が3,ただし、プラズマ性能はITERと同程度のレベルを想定している.
- この案は、万が一プラズマの高性能化が達成できなかった場合、負荷に追従する形のなかでどこまで高出力運転ができるかを検討するものである。
- 高出力モードで1GWを超えており、プラズマ性能の低さ がカバーされていることが分かる。

CSコイル (MA)	-2	0	5
プラズマ電流 (MA)	17	18	20
送電端出力(MW)	580	707	1070
中性子壁負荷(MW/m2)	1.64	1.91	2.59
運転可能時間(h)			18







